

## 75 歳以上の高齢者では厳格な降圧治療により脳の病変増大を抑制

脳の画像検査で見つかる脳白質病変は微小血管障害のひとつであるが、これが高血圧の高齢者の認知機能や運動機能の低下に関連することが示されている。本研究では、24 時間自由行動下の収縮期血圧について、標準降圧目標と厳格降圧目標を設定し、3 年間での運動能、白質病変および認知機能の変化について前向きランダム化盲検試験を実施し、比較検討した。

対象は、MRI で白質病変が確認された 75 歳以上の高血圧患者 199 例(平均 24 時間自由行動下収縮期血圧 149mmHg)で、平均年齢 80.5 歳、女性は 54%であった。対象者を、降圧薬による治療の目標値により、24 時間自由行動下の収縮期血圧 130mmHg 以下を目標値とする厳格降圧群と、145mmHg 以下を目標値とする標準降圧群に割り付けた。目標血圧は中央値 3~4 ヶ月で達成され、収縮期血圧は厳格降圧群で 127.7mmHg、標準降圧群が 144.0mmHg で両群間の差は平均 16.3mmHg であった。3 年後の歩行速度の低下については、両群に差はみられなかったが、白質病変の容積は厳格降圧群で 0.29%、標準降圧群で 0.48%増加し、厳格降圧群での増大率が有意に低かった(P=0.03)。認知機能の変化については、両群に差はみられなかった。有害事象の発生は標準降圧群のほうが、厳格降圧群よりも多かった(17 例 対 4 例、P=0.01)。転倒や失神の発生は両群で同等であった。

したがって、高血圧の高齢者における厳格降圧治療は、運動能については標準降圧治療の場合と大差はみられなかったものの、脳の白質病変の増大は有意に抑制されることが示された。3 年を超えて脳の白質病変の増大を抑制することで脳の機能が保持される可能性がある。

出典: Circulation. Published online Sep 30, 2019.

doi: 10.1161/CIRCULATIONAHA.119.041603.